

補綴専門医が考える保存・抜歯の基準：

Hopeless teeth are not necessarily useless. ～天然歯を活用する～

石部 元朗

山梨県 石部歯科医院 院長

講演抄録

補綴の観点からすると抜歯か保存かの判断基準として、一般的に残存歯質量や ferrule の状況、歯冠歯根比などが要因となる。また単独で見た場合に問題がなくても全体的な治療の戦略上、抜歯とすることもある。逆に歯がクラウンブリッジの支台歯として、あるいは義歯の鉤歯として見込みがなくても、残根状として保存し、オーバーデンチャーに利用することもあるため、最終的な補綴物も抜歯か保存かの判断基準に影響する。

生体からつくり出される天然歯と人工物であるインプラントとは構造や性質が異なり、インプラントが普及した現在においても天然歯をできる限り保存する意義は十分にあると考える。たとえば予後不良で保存することができないとしても、条件さえ合えば、即抜歯するのではなく、戦略的に次の治療へ暫間利用することによって、その後の治療や予後を有利にすることができる。

今回は、補綴治療を考慮した抜歯か保存かの判断基準に関して述べ、さらには予後不良のために抜歯することになった天然歯の暫間的な有効利用について触れる。